

藤塗装工業株式会社

AI-OCRによる受注入力業務の省力化

【導入ツール：DX Suite】

AI-OCRによる受注入力業務の省力化

— 実証概要 —

藤塗装工業株式会社 概要・実証計画【1/2】

企業概要

企業名	藤塗装工業株式会社
所在地	愛知県碧南市
代表者	藤浦 武
資本金	1,000万円
従業員数	114名
事業内容	工業塗装(金属部品塗装)
概要	自動車部品をはじめとする幅広い金属部品の塗装を手掛ける専門技能集団。 経営理念「まめ」のもと、誠実な姿勢と真心込めた「ひと手間」を大切にしている。主力技術である「カチオン電着塗装」と「吹付塗装」に加え、塗装治具の自社内製化や、30,000件超の実績に裏打ちされた高度なQCD（品質・コスト・納期）達成力を強みとし、大手自動車メーカーからも厚い信頼をいただいている。
 	

取組概要

<経営課題>

- 受注処理の多様化・複雑化により、注文書入力作業が日々膨大化しており、省力化や誤入力防止が課題
- 現状は手作業依存が高く、情報活用も限定的で生産性向上が進まない。

<本事業での取り組み概要>

- OCRによる注文情報の自動読み取り・デジタル化を進め、入力作業時間と誤入力を削減。
- 将来的にはRPA連携まで視野に入れ、省力化と受注データの一元管理を実現する。

実証体制

全体統括	執行役員 統括部長
実証統括	執行役員 統括部長
実証担当	総務部

AI-OCRによる受注入力業務の省力化 — 実証で利用するデジタルツールと目標設定 —

藤塗装工業株式会社 概要・実証計画【2/2】

実証で利用したデジタルツール

<デジタルツール概要>

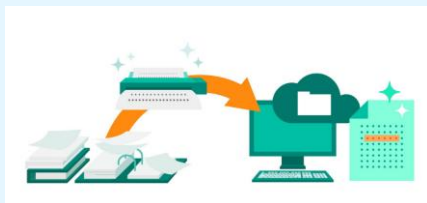
- ・ 名称：DX Suite（AI inside 株式会社）
- ・ 説明：書類処理の省力化と精度向上を目的とし、AI-OCRで書類を自動でデータ化・仕分け・CSV出力できるデジタルツール

<費用>

- ・ 初期費用：0円
- ・ 基本利用料：27,000円／月

<活用方法>

- ・ AI-OCRを活用した受注入力業務のデジタル化ツール
- ・ 手書き・PDF・FAXによる注文書をOCRで自動で読み取り、CSV化してExcelや販売管理システムへ連携することで、受注入力作業を大幅に省力化する。
- ・ 入力ミスや修正対応の発生を抑制し、業務負荷の軽減と処理スピード向上を実現するとともに、受注データの蓄積を通じて、将来的な業務自動化やデータ活用高度化に向けた検討材料とする。



※『DX Suite』はAI inside 株式会社の登録商標です。

目標とした主な成果



定量成果

① 検収時間の削減

検収明細書をAI-OCRで読み取り、販売大臣データとの自動照合および修正リスト出力を行うことで、検収作業時間を月**16時間→約1時間**へ削減

② 基幹システムへの入力時間の削減

受領書・依頼書をAI-OCRで読み取り、入力内容の検証を効率化することで、基幹システムへの**入力・チェック作業工数について、約70%を削減**

③ 台帳入力時間の削減

素材入荷時の台帳入力についても、AI-OCRによる読み取りと入力支援を行うことで、**台帳入力作業工数の約70%を削減**



定性成果

— 手入力業務

AI-OCRにより入力・確認作業を最小化し、担当者の心理的負荷を軽減した安定的な業務運用を目指す

— 注文書管理

注文書と入力データを一元管理し、検索性と共有性を高め、部門間連携を円滑化する

AI-OCRによる受注入力業務の省力化 — DX Suite 活用による具体的な取り組み内容 —

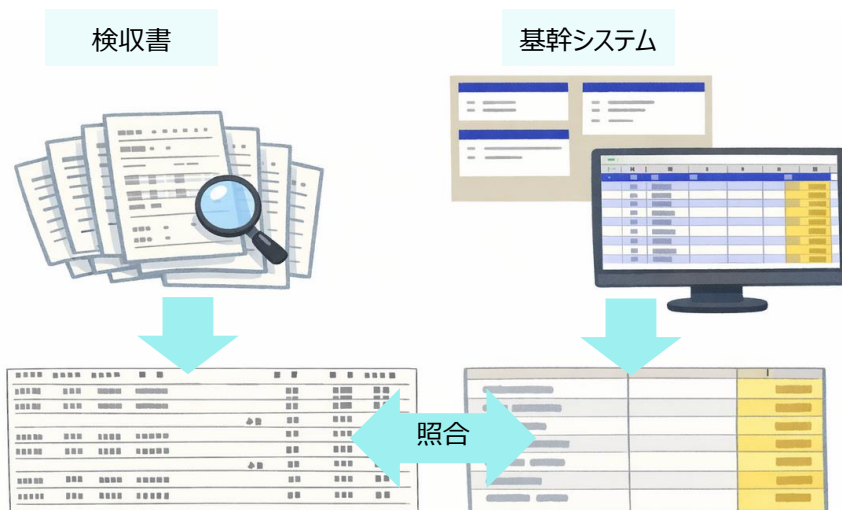
藤塗装工業株式会社 実証結果【1/5】

具体的な取り組み概要（１）

①検収時間の削減について

【デジタルツール導入前】

- ・ 客先から届く約40ページの検収書（PDF）を印刷
- ・ 基幹システムのデータをExcelへ出力
- ・ 印刷した検収書とExcelデータを見比べ、人が手作業で合計値の確認や数値の照合



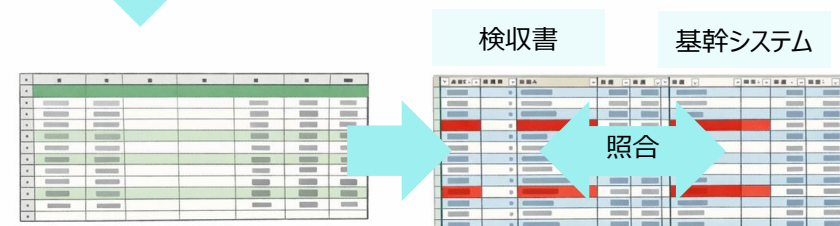
具体的な取り組み概要（１）

【デジタルツール導入後】

- ・ DX Suite の導入により、客先から受領する検収書をOCR処理し、CSVデータで出力
- ・ CSV化した検収データを社内システムへ直接取り込み、検収書データと基幹システムデータの照合を実施

The screenshot shows the DX Suite interface. It displays a table with columns for '検収書' (Inspection Sheet) and '基幹システム' (Core System). The table includes fields for '品名' (Item Name), '数量' (Quantity), and '単価' (Unit Price). A '検収書' label is overlaid on the table.

DX Suite による
データ化



人手に依存していた検収作業の工数を削減するとともに、
作業精度の向上を実現

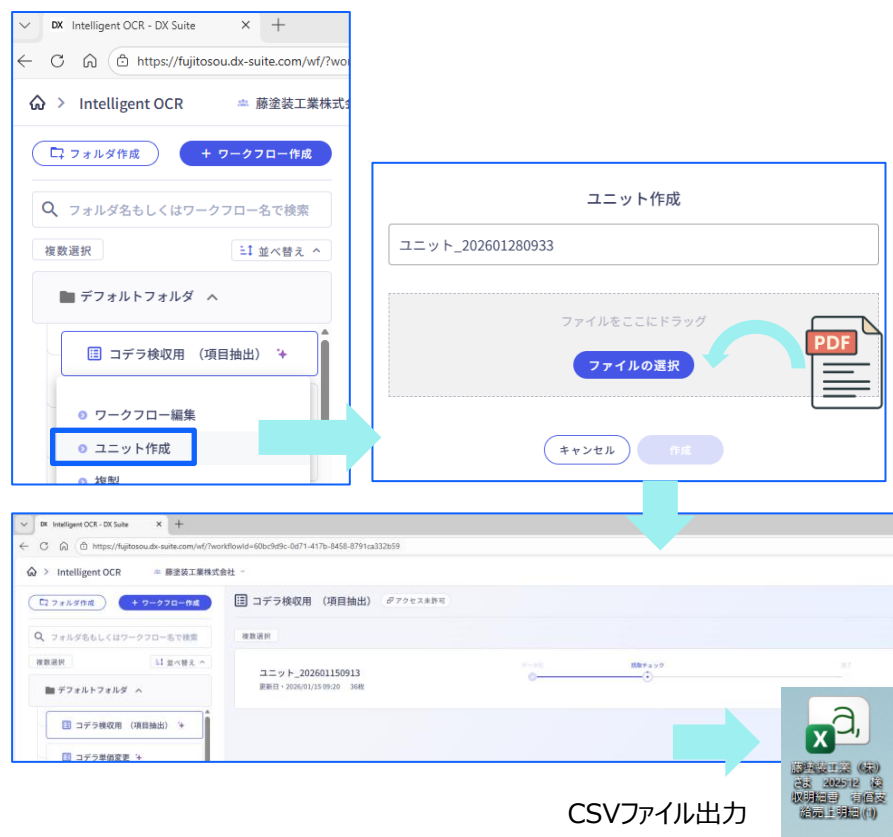
AI-OCRによる受注入力業務の省力化 — 取り組み内容と実証過程で明らかになった課題 —

藤塗装工業株式会社 実証結果【2/5】

具体的な取り組み概要（2）

実証過程で生じた課題とその対応策

実際のデジタルツール「DX Suite」利用時のイメージ



1. 初期設定

【課題】

思い通りの設定ができず、ヘルプ・マニュアルだけでは設定が合っているのか分からない

【対応策】

オンラインで使い方の説明を受け、理解できた。

その後は、直接メールでの問い合わせを行う事で解決。細かい読取設定等の知識がなく、設定方法が分からずつまずき、時間がかかってしまった。

2. 帳票フォーマット改善

【課題】

帳票が1枚1品番の手書き形式であったため、品番ごとに個別作成が必要で、1製品でも複数枚となる運用であった。また、手書き運用によりOCR読取精度が低く、作業効率化が課題となった。

【対応策】

新しくフォーマットを作成。複数品番が書けるようにした。

AI-OCRによる受注入力業務の省力化でどれだけ効果が見込めるか — 定量データに基づく工数削減・費用対効果の試算 —

藤塗装工業株式会社 実証結果【3/5】

取組の成果（１）定量効果

削減効果

デジタルツール導入における非検査時間削減の効果試算

①は実際の計測結果より算出

②③はDX Suite のOCRの読みとり性能から机上でシミュレーション

項目	部署	現状 工数 (時間/ 月)	削減率 (%)	削減効果 金額 (円/月)
①検収作業	受注 担当	48.00	93%	29,760
②基幹システムへの入力	受注 担当	385.00	70%	179,667
③台帳入力	受注 担当	145.00	70%	67,667
デジタルツール導入による 効果Total				277,093

※時間単価は便宜上一律2000円／時間で算出

取組の成果（１）定量効果

費用対効果

【効果】

項目	金額(円) ／月	ツール導入後 1年での試算
デジタルツール導入による 効果Total	277,093	3,325,120

【費用】

実際の可視化のためのデジタルツールの利用期間は約4か月であったが、ツールの契約が半年単位のため導入期間は半年で算出

項目	初期費用 (円)	金額(円)／ 月	ツール導入後 1年での試算
ツール利用料 (年間契約のみ)	0	27,000	324,000
初期導入人件費（約40 時間）	300,000	0	80,000
デジタルツール導入におけ る必要費用 Total		27,000	404,000

デジタルツール導入後1年での費用対効果の試算
3,325,120円 - 404,000円 = **2,921,120円**

AI-OCRによる受注入力業務の省力化

— これまでの成果を踏まえた、今後の目標と改善に向けたロードマップ —

藤塗装工業株式会社 実証結果【4/5】

取組の成果（２）定性効果

デジタルツールの導入による定性効果

✓ 照合精度の向上と業務の安定化

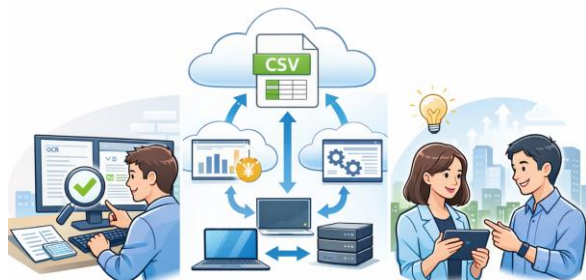
手作業による転記や目視確認を減らし、確認漏れや思い込みによるミスの抑制が期待できる。業務の進め方が標準化され、属人性の低い安定した運用につながる。

✓ データ活用・後処理のしやすさ向上

検収データをCSVで扱うことで、社内システムへの取り込みや後処理が円滑になる。過去データの検索や再確認が容易となり、確認・問い合わせ対応の効率化が期待できる。

✓ デジタル活用に対する意識の醸成

検収業務のデジタル化を通じて、日常業務の中でデータを活用する経験が蓄積される。紙や手作業に依存しない業務改善に取り組みやすい土壌の形成が期待できる。



今後の目標と課題（１）ロードマップ

受注業務のデジタル化を起点に、業務の自動化とデータ整備を進める。蓄積した受注データを活用して業務改善の範囲を拡大し、最終的には**全社最適と経営判断に活かせるDXの実現**を目指す。

	2026年	2027年	2028年
	受注業務デジタル化の確立	受注データ活用の拡大	業務高度化・経営活用
取組概要	受注業務を起点とした業務デジタル化の基盤整備	受注データを軸に業務範囲を拡張し活用開始	改善と高度化による全社最適の実現
実施内容	- OCRによる注文書・受領書の自動読取 - 受注入力の自動化による工数・誤入力削減 - 基幹システムとのデータ連携、受注データ一元管理基盤を構築	- 受注・在庫・進捗データの統合管理 - 受注データの可視化と業務改善 - RPAによる受注周辺業務の自動化	- 受注関連業務の自動化を全社展開 - データ活用による人員配置・判断最適化 - 受注データを軸とした経営判断の定着

AI-OCRによる受注入力業務の省力化と、その先の課題

— 実証結果から見た課題とデジタル活用に取り組む企業へのメッセージ —

藤塗装工業株式会社 実証結果【5/5】

今後の目標と課題（２）課題

今後の課題

■ OCR精度の継続的な向上



帳票レイアウトや記載方法の違いにより、OCR結果にばらつきが生じる可能性がある。帳票パターンの追加や設定見直しを行い、安定した運用を目指す必要がある。

■ 業務フローへの定着



デジタル化した検収データを前提とした業務フローへの切り替えが必要となる。現場での運用ルール整理や定着に向けた調整が課題となる。

■ 例外・イレギュラー対応



全ての検収書を自動処理できるわけではなく、例外的な確認作業は引き続き発生する。自動処理と人手対応の切り分けを明確にする必要がある。

■ データ活用の拡張



現時点では検収業務中心の活用に留まっている。今後は台帳管理をRPAを導入してデータの活用を行う予定。また、他業務への展開や、データ活用範囲の拡張を検討していく必要がある。

デジタル化を推進する企業へのメッセージ

1. いきなり高いところを目指さない。

今の業務の小さい範囲からスタートして、**成功事例**を作って横展開をして、デジタル化を広めていったほうが、失敗しても影響が少なく、とりかかりやすいと思う。

2. わからないからみんなで学んでいく。

知識がある人、無い人がいて当たり前で、わからないことを理解できるまで、聞き習得する。

3. 目標を決める。

各部署で何をやってどう効果が出るのかを決め、実施していく。困りごとは、都度打ち上げ、相談し解決策を考えていく。